

令和元年6月26日現在

機関番号：12101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07165

研究課題名(和文) 出版当時の議論状況を反映させたカント『実践理性批判』の再検討

研究課題名(英文) Kant's Critique of Practical Reason reconsidered by emphasizing the controversy between Kant and other thinkers

研究代表者

田原 彰太郎 (Tahara, Shotaro)

茨城大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：90801788

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、カント『実践理性批判』および関連著作を「論争」という観点から読み解いた。本研究がとくに注目したのは、「善に対する正の優位」というテーマである。このテーマは様々な解釈が可能なものではあるが、カントに即して解すれば、「幸福に対する道徳の優位」をこのテーマは意味している。道徳に対する幸福の優位を主張する様々な思想家に対抗して、幸福に対する道徳の優位をカントが説くというのが、本研究の着眼点である「論争」の内実である。本研究によって、カントが反論を試みた「道徳に対する幸福の優位」はどのようなものであり、カントがどのような論拠からそれらに対して反論を行ったのかが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

カントの実践哲学は、倫理学の歴史を考えるうえでも、現在の倫理学研究の動向を理解するうえでも重要である。『実践理性批判』はこのカントの実践哲学における最重要著作のひとつである。以下の関連する二つの点において本研究は、今後のカント研究、さらにより広く倫理学研究にも有意義だと思われる。(1)本研究は、『実践理性批判』をカントと同時代の思想家との論争という新しい切り口から理解する道を開いた。(2)本研究は、実践哲学における「論争家としてのカント」を論じた。このような論じ方自体が、これまでのカント研究のなかにはあまりなかったものである。

研究成果の概要(英文)：This research investigated Kant's Critique of Practical Reason and other related works by emphasizing the controversy between Kant and other thinkers. This research focused especially on the theme "the priority of the right over the good". Based on Kant's practical philosophy, this theme is interpreted to mean the priority of the morality over the happiness. It is the controversy which is emphasized by this research that Kant brings counterarguments against arguments for the priority of the happiness over the morality. This research clarified what kinds of the priority of the happiness over the morality Kant objects and how Kant aims to refute them.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：イマヌエル・カント 『実践理性批判』 善に対する正の優位

1. 研究開始当初の背景

カント『実践理性批判』(1787年)を正確に理解するためには、この著作が出版された当時のカント哲学を巡る議論状況を再構成し、それを『実践理性批判』の読解に反映させる必要がある。これが申請時に報告者を本研究の基礎的構想へと導いたアイデアである。

カント実践哲学に関しては、国内・国外ともに、いままなお多くの質の高い研究文献が出版され続けている。ただし、『実践理性批判』に関しては、この著作の知名度の高さから考えると意外なことに、事情が異なる。カント実践哲学に含まれる諸著作のなかで、とくに研究が集中しているのは、『道徳形而上学の基礎づけ』(1785年)である。この著作で示されたカントの所説(とその解釈)が、一般に流布している「カント倫理学」のイメージを形成していると言ってよいだろう。また、ロールズやハーバマスなどがカントからの影響のもとで政治哲学、法哲学を展開したことから、いわゆる「法論」などのカント自身の政治哲学、法哲学と見なしている諸文献の研究も活気づいている。こういった研究の陰に隠れ、『実践理性批判』の研究は疎かにされてきた。もちろん、『実践理性批判』の研究がまったくなく、というわけではない。しかし、『実践理性批判』の研究は、とくに『道徳形而上学の基礎づけ』第三章の定言命法の演繹と『実践理性批判』における理性の事実との関係を中心に、ごく限られたテーマのもとでしか進められてこなかった。近年になってようやく、『実践理性批判』を重視する研究が出版され始めた。*Kritik der praktischen Vernunft* (hrsg. von O. Höffe, 2002)、*Kants "Kritik der praktischen Vernunft". Ein Kommentar* (G. Sala, 2004)、*Kant's 'Critique of Practical Reason'* (edited by A. Reath and J. Timmermann, 2010)などの文献が、『実践理性批判』の再検討という新たな傾向を形成し始めている。本研究は、この傾向をとともに形成・強化するものである。

この国際的傾向のなかでの本研究の特色が、『実践理性批判』の読解にこの著作が出版された当時の議論状況を反映させるという冒頭に述べたアイデアである。報告者はかつて最高善の研究を行った。この最高善研究の趣旨は、『実践理性批判』「弁証論」における最高善論を、同時代の批判に対するカント自身の応答として読解するものであった。本研究は、同時代の批判への応答というこの読解方針をこの研究から引き継ぎ、それを最高善以外の『実践理性批判』の各テーマへと拡張するものである。

2. 研究の目的

申請時における本研究の目的は、以下の三つであった。

(1) 『実践理性批判』の成立事情

『道徳形而上学の基礎づけ』からわずか2年後、この著作と同じく倫理学を主題とする『実践理性批判』がなぜ唐突に出版されたのか、という問いは、多くの研究者をいままなお悩ませている問いである。『道徳形而上学の基礎づけ』には、出版当初、多くの批判が寄せられた。『実践理性批判』が出版された理由のひとつは、その批判に答えるためであったという仮説を本研究では立て、この仮説を証明することによって、この問いに答える。

(2) 「理性の事実」論の狙い

『実践理性批判』のなかで研究が集中しているテーマが、道徳法則が意識のうちにはいわば事実として与えられているとする「理性の事実」論である。このテーマの研究は、主に、そもそも理性の事実とは何か、『道徳形而上学の基礎づけ』第三章からの立場の転回があったのか、という問題を中心に行われてきた。この議論状況のなかで見逃されているのは、そもそも何を目的としてこの理性の事実は主張されているのか、という問いである。本研究では、同時代の経験論者を論駁することが「理性の事実」論の狙いである、という仮説を立て、この仮説を証明することによって、この問いに答える。

(3) 正と善

正と善との関係はこれまでに政治哲学、倫理学のなかで広く問われてきた。カント哲学において正と善との関係は、『実践理性批判』のなかで「善悪の概念は道徳法則〔= 正の法則〕を通じて規定される」とする「方法の逆説」によって、主題化されている。本研究では、この「方法の逆説」が当時の経験論者を批判する意図のもとで主張されたという仮説を立て、この仮説を証明することによって、「方法の逆説」の新解釈を基礎としてカントにおける「正と善」を解明する。上述の最高善研究においても「方法の逆説」を論じたが、本研究では「正と善」というテーマのもとで『実践理性批判』の「概念章」をより詳しく分析することによって、この論点を再論する。

3. 研究の方法

本研究は、基本的には個人研究であり、文献の読解が主たる研究方法であった。同時代の批判の重要性を認めつつ『実践理性批判』を読解する、という研究方針の先端研究者であるハイナー・クレンメの研究成果を参考にして『実践理性批判』の読解を進め、『実践理性批判』全体に同時代の批判への応答が含まれていることを確認した。同時代の批判の研究に関してはとくに、1781年から1787年までのカント哲学に対する批評を集めた Albert Landau, *Rezensionen zur Kantischen Philosophie* (Bebra, 1991)の読解を行った。『実践理性批判』の概念章を理解するためにとくに重要なのは、ピストリウスによる『道徳形而上学の基礎づけ』批判であるが、このピストリウスの批判に関しては最近の研究成果 Bernward Gesang, *Kants vergessener Rezensent*

(Felix Meiner, 2007) も参照した。

本研究で主題的に論じた「善に対する正の優位」に関しては、このテーマが有名になるきっかけであるジョン・ロールズ『正義論』とマイケル・サンデル『リベラリズムと正義の限界』の読解を行った。そのうえで、このテーマに関しては、『実践理性批判』だけではなく、「理論では正しいかもしれないが実践の役には立たない、という俗言について」や『道徳形而上学』の「法論」というカントの著作物の読解をも行った。

本研究の遂行過程で、「第六回大阪哲学ゼミナール」にて英語での口頭発表を行った。この発表も本研究の進展にとって有益であった

4. 研究成果

本研究の主たる成果は、これまでに十分には注目されてこなかった「論争家としてのカント」像を描くことができたという点である。

本研究がとくに注目したのは、「善に対する正の優位」というテーマである。まず、ロールズとサンデルへと着目しつつ『実践理性批判』などを読解することによって、カントのなかに見出しうる「善に対する正の優位」に関しては、「善の優位」批判が焦点となるということをも本研究は明らかにした。カントによる「善の優位」批判の内実は、以下の通りである。

「倫理」に関してカントは『実践理性批判』において、目的論的倫理学は道徳法則の普遍妥当性を説明できないという点、目的論的倫理学は不可避的に論点先取の誤りを犯すという点において、ピストリウスによる「善の優位」の主張を批判する。さらに、「理論では正しいかもしれないが実践の役には立たないという俗言について」においてカントは、「善の優位」を擁護しようとするガルヴェの試みなかで出された道徳と幸福との区別不可能性の主張を、「理性の事実」の教説を使って否定する。おもに『実践理性批判』のなかで展開される理性の事実論が、ガルヴェへの再批判という文脈でも展開されていることが、この考察によって明らかになった。以上が「倫理」における「善の優位」批判である。本研究はそれに加え、国民の幸福を実現するための抵抗にも専制主義にも反対する、というかたちで展開されるカントの法理論における「善の優位」批判をも分析した。

以上の研究は、英語での口頭発表““The priority of the right over the good” reconsidered in a Kantian way”、ならびに、論文「カントと徳の問題」という成果として結実した。そのほかに報告者は、『ドイツ哲学・思想事典』（ミネルヴァ書房、2020年発行予定）における項目「『実践理性批判』」、「最高善」を本研究実施年度中に執筆したが、それらも本研究課題の研究成果にもとづくものである。

本研究の成果が与えるインパクトとして、以下の三点を挙げる。

(1) 本研究は、論争という観点から『実践理性批判』を読み解く可能性の一端を示した。このような読み方はカント研究においてまだ十分には掘り下げられてはいないゆえに、本研究は今後の『実践理性批判』研究が参考にできる新しい研究方向を示しえたと思われる。

(2) 現在一般的に流布している「カント倫理学」のイメージは、主として『道徳形而上学の基礎づけ』をもとにしている。本研究は、『道徳形而上学の基礎づけ』への批判を踏まえ、『実践理性批判』が書かれていることを示し、さらに、『実践理性批判』で扱われた問題がその後の著作においても再論されていることを示した。これらのことを示すことができた本研究は、『道徳形而上学の基礎づけ』だけをもとにした偏った「カント倫理学」のイメージを修正するための一助となるはずである。

(3) 本研究は、「善に対する正の優位」をカント実践哲学に即して解明した。「正と善」は、義務論と功利主義、道徳と個人的統合性などの論点にも結び付いている主題である。カント実践哲学に即してこの「正と善」を掘り下げて考察した本研究は、これらの関連する論点に関する研究にも有用だと思われる。

本研究の今後の展望は以下の通りである。本研究では、「理性の事実」についての研究を行った。この「理性の事実」については、『実践理性批判』出版以後にガルヴェとの対決のなかで再論されているという新たな知見を、本研究の遂行過程で得ることができた。しかし、「理性の事実」については、『実践理性批判』に即してより掘り下げて考察することが必要である。本研究では、『実践理性批判』出版以前に公表された様々なカント批判の読解を行ったが、それらのカント批判と「理性の事実」の教説の関連を明らかにすることによって、「理性の事実」の教説をこれまでの研究史のなかではあまりなされていないような仕方掘り下げて明らかにすることができるように思われる。同時代におけるカント批判とカント自身による応答という本研究の基本方針が、『実践理性批判』を正確に理解するために重要であることは、本研究によってある程度は明らかになったと思われる。この基本方針のもとで継続的に『実践理性批判』を読解することによって、「理性の事実」の教説についての考察を深め、この点についての今後の成果発表へとつなげたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

田原彰太郎、「カントと徳の問題 善に対する正の優位を通してのアプローチ」、菊池理夫、有賀誠、田上孝一(編)『徳と政治 徳倫理と政治哲学の接点』所収、晃洋書房、2019

年、85 - 104 頁（査読なし）

〔学会発表〕（計 1 件）

Shotaro Tahara, “The priority of the right over the good” reconsidered in a Kantian way、第六回大阪哲学ゼミナール、2018 年 9 月。

〔図書〕（計 〃 件）

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。